

公益社団法人子ども情報研究センター
代表理事就任のご挨拶

山崎 秀子

私は障害児の共生共育について関心があり、子ども情報研究センターの「障害児の生活と共育を考える部会」に出会い、1994年に入会しました。毎月開催される部会では、いろいろな年齢や仕事、障害のあるなし、多様な人が集まって率直に意見が交換され、自分の価値観や考え方を揺さぶられることばかりでした。差別や排除に厳しく、自分を問われる場でもありながら、一人ひとりが大事にされる時間でした。私が長らくセンターに関わる原点は、この部会にあります。そして、その原点への出会いを生んだのは、出身地の豊中市の教育だったと思います。障害のある子どもも、同じクラスで共に育つという環境がありました。

この四半世紀、社会は大きく変わりました。保育・教育・子育て、ジェンダー、障害等、人権にかかわる社会的課題に対し、私たちのような民間団体や市民グループ、ボランティアが活動を広げていきました。その後、行政が担ってきた事業が民間へ委託される時代となりました。子ども情報研究センターでは、行政に働きかけて事業を共に作り、また、独自に始めていたものを行政の枠組みで委託を受けて独自性を発揮しながらおこなう形に切り替えたりしながら、事業を拡大してきました。

そして、2014年に公益社団法人へ移行し、同時に保育所の運営をはじめました。公益法人になるということは、並大抵のことではありませんでした。今まで以上に、自分たちの事業は、何のために、何をめざして、おこなっているのかを見直しました。会員スタッフと協議し、外部の人たちに伝え理解を求める機会となりました。現在、多岐にわたる事業が日々おこなわれています。全国の公益法人をみても、子どもの人権を基盤に、0歳から18歳の子ども、そして家庭にかかわる研究・相談・権利擁護事業をおこなっている団体は他にはありません。

この春、新型コロナウイルス感染防止対策として、日本でも罰則はないとはいえ、移動や集会の自粛が求められました。子どもたちが教育を受ける権利、知る権利、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利が脅かされています。私たちができることは、多様性や自由が管理されることに對し疑問を投げかけ、自分たちはどう生きるのかを対話すること、子どもの声を聴くことではないでしょうか。

私は、人に関わる仕事こそクリエイティブな仕事だと思っています。あらかじめ正解があるのではなく、共に創っていく、子ども情報研究センターの事業は全てそのように創ってきたものばかりです。「ピンチをチャンスに」という言葉があります。今まさに、知恵を出し合うとき。初代所長鈴木祥蔵先生がよく引用されたフランスの詩人ルイ・アラゴンの言葉「共に希望を語る」場をつくってまいりたいと思います。

みなさまどうぞよろしく願いいたします。